カラーテレビの「色」の研究成果…

アンケートを分析した結果、気になる色の第１位はダントツで肌色でしたが、ほかに記入されていたもののうち、自然界のものとしては、青空と草の緑の二つだけが含まれていたのです。バートルソンはそこまで調べたとは書いていないので、多分山カン的に選んだのでしょうが、調査結果に現れたのは予想外でした。早速テレビジョン学会の全国大会で口頭発表したところ、今まで誰も調べたことがなかったということで、こちらがびっくりするような反響があり、質問攻めに会いました。

ただ、口頭発表というのは簡単な紙一枚の概要しか残らないので、近頃色再現についての論文を見ると「周知のごとく色再現において肌色、青空、草木の緑が重要である」とすっかり出所不明の公知の事実になってしまっています。逆に言えばどこかの若造が何やら言っていたことがもはや周知であるというのは、それだけの価値があったわけで、言い出しっぺとしてはとても嬉しいことです。

研究資金は、富士写真フイルムが100万円の研究費を公募していたので応募したら、あっさり貰えました。当時の日本では目新しい題目だったのでしょう。

この資金をもとに、「カラーテレビの好ましい色再現」を調べました。結果をおおまかにいうと、カラー画像での好ましい再現色は日本人女性の肌色の実測値に近い色、青空と草木の緑は現実のものよりずっと彩度の高い色が好まれるということです。この結果はテレビジョン学会誌に投稿して、論文賞を頂き、その後たびたび引用されました。この実績で放送文化基金の研究資金600万円を貰い、今度は結構上等の実験機器を揃えたのですが、これ以後のカラーテレビの色再現の仕事は最初の論文に較べると二番煎じの、程度の悪いものになってしまいました。よい設備があればよい研究ができるとは限らない、むしろ悪い設備でも何とかしようという気合いと執念がずっと大事な場合もあるという、よい教訓を得たと思います。

色が好ましいか好ましくないかは人間が判断するのです。この研究に用いた手法は心理計測法そのものでした。心理学は全くの素人でしたが、実験心理学の方法を中心に、心理学全般について独学で勉強しました。心理学というといわゆる文系の学問と思われるかも知れませんが、実験心理学の方法はほとんど自然科学の方法と同じです。多くの実験結果の処理には数理統計学を用います。学生のときにはわけがわからず、お情けで単位を貰った数理統計学でしたが、仕事となると結構真面目に勉強ができるもので、とりあえず必要な知識はこれも独学で獲得しました。

これ以後の私の仕事は一貫して、この心理計測法を製品の使い勝手とか、視環境や音響環境の評価に応用するという「心理工学」とか「知覚工学」という分野のもので、口幅ったいようですが、この分野では開拓者の一人だったかと思います。

終生の課題は色の「深み感」

比較的最近の研究テーマの一つは色の「深み感」です。上等の漆器などの色をみると、安物とははっきりした違いが見えることが多いのですが、職人さんはこの違いを「深み」が違うと言います。深みを感じる色とはどういう色か、それを感じさせる要因は何か、一つ調べてみようと始めました。

残念ながら未完成です。基礎的なデータは取ったのですが、要因の解析までには至っていません。「深み感」は手強い相手です。事実私と、共同研究者である前任校の大学院生以外の誰も手をつけていません。時間を使う割に論文の数がかせげないので、大学の教師でこういうことに手出しをしようというのは余程の変人なのでしょう。一生かかっても完成しないと思いますが、死ぬまで考え続けて行くつもりです。

1999年に前任校停年退職と同時に、本学に勤務させて頂くことになり、私自身最も好きな分野の授業を担当させて頂いています。本当に幸せなことだと思います。できればこの大学に骨を埋めたいと思います。

最後に、自分の通ってきた道を考えたとき、何一つとして自分一人の力でできたものはありませんでした。先輩の指導や、同僚の暖かい目や、後輩の協力なしには何もできなかったと思います。仕事に限らず、人間はお互いに力を貸したり借りたりしながら生きているのだと改めて思います。私は教師ですが、逆に学生の皆さんが私の教師でもあるのです。学会賞の受賞を機に、自分の人生を見つめ直しているのが今の私です。

キャンパス トピックス

■「マンガ・アニメの現状と将来展望」

8月21日から3日間、新宿キャンパスで夏季特別セミナー開催

宝塚造形芸術大学とマンガ・アニメ情報学会（準備中）は夏季特別セミナーとして「マンガ・アニメの現状と将来展望」を８月21日から23日までの３日間、新宿キャンパスで開きます。マンガ・アニメを取り巻く内外の状況を第一線の作家、識者、編集者が話します。参加費無料。高校生の聴講を歓迎します。

新宿キャンパス（東京都新宿区西新宿7−11−1、電話03−3367−3411）はJR西新宿駅西口から歩いて約４分。その他地下鉄、西武線、小田急、京王のそれぞれ新宿駅から２分−5分の距離にあります。

日程はつぎのとおりです。

●21日

午前中は、松本零士氏（漫画家・宝塚造形芸術大学教授）の基調講演「マンガ・アニメの現状と将来展望」。午後は松谷孝征氏（手塚プロダクション）が「マンガとアニメと手塚治虫」について、中野晴行氏（評論家）が「マンガ産業論」について、それぞれ話します。

●22日

午前中、森谷康弘・西野文子の両氏（講談社デジタル事業局）が「デジタルコミックスの現状と将来」について話します。午後から葛西治氏（東映アニメーション）が「アニメクリエイターの現状と課題」、八窪頼明氏（元小学館編集者）が「マンガ編集者とは」について話します。

●23日

午前中は本学教授の西上晴雄氏が「2007年サンディエゴ・コミコン報告世界の中の日本マンガ」、同月岡貞夫氏が「コンテンツとキャラクター性」について、午後は宮本大人氏（評論家）が「時代とマンガ」、小野耕世氏（評論家）が「外国マンガと日本人」について、それぞれ話します。

■ 本学など17大学が参加して「関西社会人大学院連合」を設立

都心部の活性化・産業との交流・人材育成をめざす

NPO法人として「関西社会人大学院連合」が６月末に設立され、理事長には関西学院大学の平松一夫学長が、また本学の菅原正博・専門職大学院デザイン経営研究科長は監事に就任しました。これは関西経済連合会がかねてすすめている大学機能の都心部集積を促進しようというプロジェクトに応じるもので、大学と経済界が緊密な連携をとりながら事業をすすめていきます。

大学を都心部に呼ぶことで若者と知の集積をはかり、それは大阪の活性化・経済再生につながるという目的があります。また、大学院によって若い企業人・社会人の能力がアップし、企業の人材育成に役立つという期待も企業の側にあります。

今後は大学院連合と関西経済連合会が共同でシンポジウムや話し合いの場をもち、企業からの大学院入学や、自治体をくわえた産官学の連携事業や地域社会への貢献などをめざします。

■ 大阪府高等学校第一ブロック美術科教諭の学内見学

10月12日（金）午後２時から本学宝塚キャンパス。参加するのは北野、東淀川、西淀川、池田、渋谷、池田北、豊中、桜塚、豊島、刀根山、箕面、宣信、聖母被昇天、箕面学園、箕面自由学園の15高校の先生方で、このなかには来春から美術学科に開設する「アートセラピー・コース」についての梅本守教授の説明会も予定されています。

平成19年８月15日発行 ■発行所 宝塚造形芸術大学 〒665-0803 宝塚市花屋敷つつじガ丘７番27号 PHONE 072-756-1231
■発行人 橋爪竹一郎 ■編集 橋爪竹一郎 尾崎 勇 ［URL］http://www.takara-univ.ac.jp
フリーダイヤル 0120-561-257
［E-mail］info@takara-univ.ac.jp

ArtHill NEWSL
No.78 2007年 8月号
宝塚造形芸術大学

夏季特集 教員の学外活動レポート

夏休み。この一ヶ月の休暇を学生の皆さんはどう過ごしていますか？

自由な学生時代のなかでも、日常の授業を離れての長いフリータイムですね。みなさんが日常性の枠をはずし、多様な冒険やチャレンジを試みるリハーサル舞台なのでしょう。

教員もがんばっています。5人の先生方に学外活動レポートを書いていただきました。

イタリアに嶋本昭三美術館が誕生しました。

イタリアのモッラ財団などの働きかけでイタリアに今年6月、嶋本昭三美術館が設立されました。嶋本氏は本学教授で、国際的に著名な前衛美術の作家ですが、同館は嶋本先生の作品を世界中に発表することを目的とし、嶋本作品のアーカイブ形式の研究機関、売買もできるギャラリー、そして作品を鑑賞できる展示場、この3つの機能を持っています。

嶋本昭三美術館での記念式典

嶋本 昭三先生のレポート 『嶋本作品の鑑賞・売買・研究機関も…』

従来よりイタリアでは嶋本昭三のアートに興味のある人が多く、この現象は1961年に具体美術協会のメンバーとして、トリーノで紹介されたことから始まりました。その後も世界中で行われる様々なイベントや展覧会で嶋本は紹介され、2007年に来日したイタリアの代表との交渉により、嶋本昭三美術館がイタリアで設立されるに至りました。嶋本昭三美術館には100号や200号の大作を始め、約317点の作品がレッジョ・エミーリアにある約220㎡のアーカイブ本部に預けられ、今なおファンが増え続けているとのことで、新たな嶋本の作品がイタリアで要求されています。

嶋本昭三美術館の広さは82平方メートルほど。日本の美術館とは違い、作品の売買も行われます。研究機関も設置されるアーカイブ形式を取り、ギャラリーともいえるのではないかという意見もあります。しかしロンドンのテートギャラリなど、日本の美術館よりはるかに大きなギャラリーもあり、現代美術の世界最大の展示場も、「パリのポンピドーセンター」という呼ばれ方をしています。

ただ、日本の美術館との一番大きな違いは、コレクションの方法ではないかと思います。例えば、ぼくの作品は日本の美術館が数十点求めてくれていますが、１点買うにも手続きが複雑で手間がかかり何かと大変なのに対し、イタリアは約100点をざっくりまとめて一気にコレクションしてくれたりで非常にアッケラカンとしたところがあります。

そして美術館だけではなく、イタリアには世界の美術のお祭り「ベネチア・ビエンナーレ」があり、ぼくは過去３回ベネチア・ビエンナーレに選ばれています。また、プロ野球の殿堂にイチロー選手が選ばれて話題になりましたが、ベネチアにも美術の殿堂、「カ・ペーサロ美術館」というのが存在し、2005年にはぼくの作品も殿堂入りを果たしました。

何もイタリアだけが特別というわけでもありませんが、とにかく３人のイタリア人が関わってくれたおかげで嶋本昭三美術館が出来ました。師・吉原治良の下で戦後活躍した具体美術についても、海外からは現在なお多くの問い合わせがありますが、この度設立されたイタリアの嶋本昭三美術館ではアーカイブも設置され、嶋本昭三個人のみならず「具体」や「AU」関係の資料を、誰もが用意にイタリアで問い合わせたり、見たりすることが出来るようになった事は非常に喜ばしいです。更にヨーロッパで毎年のように企画される嶋本昭三達の展覧会の依頼も今後はもっと簡便に引きうけることが可能となり、さらにはぼく自身が新しい構想に基づいて現地で積極的に大きく展開できることが何よりもありがたいです。

Report

成瀬 國晴先生のレポート　『テレビ絵の集大成を出版』

念願の画集をだした。

画集はすでに４冊出ている。

1965年、阪神タイガースが吉田義男監督のもと日本一になったときの「甲子園ドキュメントスケッチ」が最初で、その後「大相撲」(1996)「天神祭」(1999)そして星野監督で優勝したときの「阪神タイガースの20年・夢は正夢」(2003)とつづく。

その間「新上方タレント101人」「なにわ難波のかやくめし」などがある。

いずれも、10年、17年と描きためたものだけに、それはそれなりの想いがこもっている絵だが、こんどの「アナログ時代のテレビ絵史」(たる出版刊3100円)は格別の思いがある。

着想して40年、とりかかってから25年経つ年代物で内容は担当したテレビ番組のために描いた絵173番組、1135点を掲載したもので274ページの中にテレビの歴史がいっぱいつまったものだからだ。

私のイラストの歴史でもあるこの画集のあとは50年ものがまっている。

20才台から描きだし、いまもつづいているもので若者の風俗だ。

流行に敏感な若者たちを描いているうちに時代が動き、そのフアッションが変化している証が手許に残った。

いずれ形になることを望んでいる。

わたしは、大阪に軸足をおいた風俗画を描くことを信念にしている。

大相撲は春場所、阪神タイガース、天神祭などみんなそうだ。

大阪府立上方演芸資料館(ワッハ上方)には上方の演芸に寄与して顕彰され殿堂入りした35点、52人の上方芸人を描いて展示されているし、昨年できた天満天神繁昌亭には戦後の上方落語発展のために尽くした六代目笑福亭松鶴、人間国宝桂米朝、五代目桂文枝、三代目桂春団治ら四天王と呼ばれる方々の絵も寄贈した。

また、今年できた大阪府池田市の「落語ミュージアム」の外壁にも「池田の猪買い」の絵がある。

天神祭

初代桂春團治

大阪玉造・三光神社境内にある真田の抜け穴前の真田幸村像、高津神社・絵馬堂内の落語絵馬など大阪のあちこちにわたしの絵は散らばってある。

今、わたしの出生地大阪ミナミの成り立ちを書いた「なにわ難波のかやくめし」(1998・東方出版刊)につづいた戦後史「今里新ドローム」を産経新聞、毎木曜夕刊で連載中をはじめ日経新聞、毎金曜夕刊「寄り道グルメ」挿絵、読売新聞インターネット『成瀬國晴のオイシイとこどり』、同桂三枝の「激情川柳」審査およびエッセイ、スポーツニッポン新聞タイガース川柳選者，同阪神巨人戦のイラスト、「小説すばる」の落語小説さし絵、長野県木曽のゴルフ場風景画などを手がけている。

Report

増井 英先生のレポート　『「マンガ・劇画・アニメ」に有効な素描の技法』

素描を蔑視する偏見は、つい最近まで続いている。

これは素描は油絵より一段下で、タブローの下絵にすぎないという見方があるからである。

だが、本当にそうだろうか。

素描はそんなにツマラないものだろうか。

未完成だからダメだと断定してしまっていいのだろうか。

私はそうは思わない。

＊　＊

歴史的にはレオナルド・ダ・ヴィンチの「紙葉」が、最も秀逸な素描だと言われている。

アンブロジアーナ図書館の4000枚、フランス学士院図書館の13の草稿と手帳、大英博物館のウィンザー宮の草稿など全部を合わせると厖大な数量になる。

これらの素描は質においても最高度とされている。

例えば、この素描を同時代の巨匠ミケランジェロの代表作ヴァチカン・システィナ礼拝堂の「最後の審判」フレスコ画と比較してみよう。すると、その質の優劣は一目瞭然である。

つまり、形式として正面祭壇画の「最後の審判」は確かに大作の大画面であり、立派に完成している。だが、内容的には聖書の死・審判・天国・地獄の四終に制約されてしまっているから、宗教的に限定した狭い世界しか示していない。

だが、一方のレオナルド・ダ・ヴィンチの「紙葉」は素描ながら、同テーマの終末「大洪水」の連作で、卓越した物理的地質学的観察力から「世界の没落」を予告し、質的な拡がりのある表現を成し遂げている。

現在、若者の美術アートの興味は「マンガ」「劇画」「アニメ」のメディア・コンテンツ学部の分野に集中している。これらの表現を油絵でするには無理がある。材質が重すぎるのである。

もっと軽い鉛筆、ペン、木炭、パステル、水彩、ポスターカラー、つまり素描用マチエールが必要となる。これは黒沢 明が試みた映画脚本の絵コンテからも、すでに明瞭である。

素描は長い間、軽んじられてきたが、今やその軽さが、尖端美術の技法として必要になってきた。軽いが故に自由な拡がりが生まれ、固定化した油彩、岩絵具、フレスコの古い技法では予想もできない世界が出現するのである。

素描の重要なポイントは「形式の転換」の実験である。音楽、彫刻、建築、解剖学、地質的、自然科学、芝居、文学、映画など、あらゆる分野と美術との交流を素描を通じて実践することである。

そこから新しいスタイルのアートが誕生するだろう。――――――

このように素描とは最もストレートな表現技法であり、新しい冒険者なのです。

この意味で2007年６月９日より18日まで素描作品120点を大阪京町堀・ギャラリー松井で展示しました。

個展には美術関係者や大学関係者などが多くみえられ、素描について意見を聞きました。これらの人たちの反応から、ますます素描が重要だと思いました。

どうぞ、高校生の造形大を希望する皆さんも、素描について考えてみてください。

Report

志水 英二先生のレポート　『20年ぶりの上海再訪　ウエアラブルコンピューターの講演の旅』

考える頭は要らない　働く手足だけが要る時代だった

20年前、大阪市立大学時代、大阪市と上海市が姉妹都市であることから、しばしば交換教授で上海工業大学に１ヶ月の講義に訪れました。外国人には正規のお金が使えず兌換券という外国人用のお金が用意されていた頃、文化大革命という大中国を根底からゆるがす出来事が終わった頃です。中国には考える頭は要らない、働く手足だけが要る、という思想が基本になっていて、大学の先生方、学生が軽んじられていた時代でした。学長室の横の部屋にワンボードのマイコンがガラスケースに入れられ自慢の品になり、主任教授の先生宅を訪れると、小さな共同住宅に祖父母、先生一家が住まわれていて、先生の論文の下書きがトイレに…。それでも、先生方と学生の学問、勉強への意欲はすばらしく、せっかくの機会だからと、1日中、講義をしなければなりませんでした。講義が終わっても質問攻め、宿舎であるゲストハウスに若い先生方がおいでになり、夜遅くまで議論をすることもしばしばでした。おかげで、日本の商社の人達から聞かされていた上海ガニを始めとするすばらしい上海料理を口にすることもありませんでした。娯楽もなくスポーツシューズを持参して、余暇はグランドでジョギング三昧でした。帰国するときは、書籍、資料、文房具、スポーツ用具の全てを先生方にプレセントし、身体ひとつで、伊丹空港に降り立つのが恒例でした。

国有地に林立する民間高層ビル ―― 歯止めなきバブル！？

先日、久しぶりに上海を訪れる機会にめぐまれました。主目的は上海交通大学、理工大学でのウエアラブルコンピュータの最新動向についての講演でした。溢れていた自転車のかわりに自動車、林立する高層ビル、宿舎の豪華ホテル。応対していただいた先生の誇らしげなお言葉「昔は、ビルは政府が建てるものでしたが、今は、志水先生がご覧になっているすばらしいビルは全て民間が建てたのですよ」。我が国のバブルは土地の値上がりが終焉のきっかけになりました。しかし、上海では、土地は全て政府のものですから値上がりはありません。まさに歯止めなきバブルです。今日も、豪華ビルのお披露目が行われていることでしょう。帰国後、本学の同僚教員に話すと、「中世封建時代の悪しき仕組みと資本主義の悪しき特質の結合ですね」と。そのとおりです。超高層豪華ビル群とスラム街、儲け至上の発想で溢れる商品などの種々の矛盾、大きな格差を包含しながら激しい熱気で膨張しつつある街です。

前上海師範大学学長　寶先生（左）と共に

変わらない大学事情　保守的な先生・熱心な学生

しかし、「私の上海」は相変わらず、でした。TVで報じられている、リニアモーターカー、地下鉄に乗ることもなく、きらびやかにライトアップされた有名なタワーに上がることもありませんでした。日曜日に関西空港から出発、２時間で上海国際空港、先生の車でホテルへ、翌日の講演の打ち合わせと準備、月曜日は講演と学長主催のお礼の食事会、そして火曜日朝に日本へ、水曜日には本学での授業。またもや、上海ガニはいずこに？

上海の学生の熱心さは20年前と同じでした。講演が終わってからも去る学生は少なく、質問攻め。私のサイン、持ち物、なんでもいいから下さい、今日の記念とこれからの励みにしたい、こんなうれしい言葉に溢れた一日でした。

上海の大学は変わっていないと思います。考える頭が昔より必要とされていますが、ある特定の方向、分野についてのことです。全体としては、いろいろなことを考える頭は必要とされていません。相変わらず、先生方は保守的ですが、学生達の勉強への意欲、学問への熱意はすばらしい。この熱気が中国の大学を開く日が待ち遠しいものです。

最後に、私の嘆きです。お酒の好きな私が憧れ続けている李白の竹林の酒場はどこへ？

Report

西村 武先生のレポート　『照明学会賞を受賞して』

私は５月25日に平成19年度社団法人照明学会総会の席で照明学会賞（研究業績賞）を受賞しました。

この賞は、

a.照明に密接な関係のある学術に関し、優れた研究、著述または発明を行い、その発展進歩に顕著な業績を残した会員に贈られる「研究業績賞」

b.照明技術の開発に関し、功績が顕著な会員に贈られる「技術開発賞」

c.後進の育英指導、教育普及、学会の活性化、支部活動などにより、学会発展に顕著な貢献をした会員に贈られる「功績賞」

の三つの区分があり、毎年上記各区分の内から二名以内、総数で三名以内が学会賞審査委員会で選ばれることになっています。今年度は研究業績賞が私、後の二名は功績賞の計三名が受賞しました。

照明学会の歴史は古く、設立は大正５年（1916年）11月29日ですから、今年で91年、学会賞も今回が第53回ということになります。

ちなみに照明学会において、私は「参与（副会長経験者相当）」の称号を頂いています。

本学で私の担当は大学院講義科目の「色彩照明論特論」（博士前期課程）、「色彩照明論」「環境デザイン論」（博士後期課程）で、実習科目ではありませんので、学生の皆さんには私をご存知ない方も多いかと思います。そこで今回学会の業績賞を頂いたこの機会に私のこれまでしてきた仕事の一端をお話してみようと思います。

大学では自分の仕事は自分で見つけ出す

私は1958年3月に工学部の電気工学科を卒業し、ある大手電機メーカーに就職しました。幸いにも研究所に配属され、そこでは主にカラーテレビジョン関係の開発の仕事をしていました。

1968年に大学へ出る機会があり、これは自分にとって大きな転機だと感じたので、上司に懇願して、大学に移りました。

企業から大学に来て戸惑ったのは、当たり前のことなのですが、仕事を自分で見付けないといけないことでした。企業だと会社の方針で仕事の大枠も決まります。それと資金が極端に少ないことも分かりました。幸い修士課程の大学院生が一人来てくれたので、二人で相談し、企業内という制約条件下では十分解明できず、気になっていたカラーテレビジョンの色再現性（要するにより色が出るかどうか）の仕事を始めました。これが本格的に色に関わるその後の仕事の初めです。

すでにアメリカのコダック社のバートルソンという研究者が、カラーフィルムの「好ましい色再現」という論文を1962年に発表していました。そこでこれを少し借用して、カラーテレビの「好ましい色再現」を調べることにしたのですが、問題は色再現の対象物として何を選ぶかです。バートルソンは肌色、青空、草の緑色の色再現を調べていました。この中で肌色はわかるとして、なぜ青空と草の緑を対象に選んだのかが不思議でした。

そこでNHKへ出向いて、京都市内のカラーテレビ契約者の名簿を貰ってきました。現在なら個人情報漏洩で大騒ぎになることろでしょう。約1000世帯に「カラーテレビでどの色が気になりますか」という趣旨のアンケート用紙を郵送したところ、約半数の450世帯から回答が貰えました。カラーテレビの普及率も低く、色も大変悪い時代でしたから、これだけの回収率が得られたのでしょう。今では考えられないことです。

〈4面へ続く〉